

有する顎堤が得られるが、これが露出した場合問題があり、今後その予防及び対処法について、検討の要があることが知られた。

〔症例追加〕

顆粒状ハイドロキシアパタイトに腸骨より採取した海綿骨および骨髓を混ぜて使用した顎堤形成術について

堀 稔 (日大・歯・口外)

24. 象牙質知覚過敏症に対するソフトレーザーの応用

増子善太, 田崎滋子, 森川裕一
小松利典, 高原利幸, 高原正明
今井 裕 (千大)

象牙質知覚過敏症 (17名36歯) に対して、ソフトレーザーを応用し、良好な結果を得たので報告する。結果：①ストマレーザーの、総合有効率は、69.4%である。②擦過痛、冷水痛、冷氣痛の軽減にいずれも有効であり、その有効率は、36.1%, 41.6%, 66.6%であった。③照射回数と効果の関係は、照射回数が増すとともに、改善例が増した。④照射後、あと戻り現象が認められるとともに、後効果が認められた。⑤実質欠損が少ない程効果を認めた。

25. 上下顎骨切り術により 外科的矯正をおこなった1例

川崎建治 (新潟大・歯・口外)

21歳、男性、主訴は下顎前突による発音障害。Oberjet -11mm, ober bite +2mm と著しい下顎前突で、骨格性の上顎後退症を伴った下顎前突症である。処置は、約2年間の術前矯正の後、上顎を Le Fort I 型 osteotomy により前方に5mm 平行移動させ、さらに下顎を Obwegeser Dal Pont 法にて8~10mm 後方に移動させ良好な咬合が得られた。術後22日目で退院し、現在経過観察中だが、患者は形態的にも機能的にも満足している。

26. 当科における顎変形症手術症例の検討

宮田雅代, 秋山幸生, 江上史倫
九津見雅之, 宮沢悦也, 中川哲郎
地村完二, 山下徹郎, 額賀康之
村瀬博文, 金澤正昭, 富田喜内
(東日本学園大・歯・口外)

当科における過去6年間の各種顎変形症に対する外科的矯正手術を施行した症例は68例であったが、これらの

年度症例数、男女比、平均手術年齢、主訴、症型別症例数を検討した。さらに、最も症例数の多い下顎前突症についての、手術術式、術式別平均手術時間、術式別平均出血量、術後のオトガイ神経麻痺出現率、オトガイ神経麻痺消失期間、下顎枝矢状分割法における骨片固定法について検索を加えたので報告した。

27. 進行性化骨性筋炎による開口障害の1例

桜庭 裕, 武宮三三, 嶋田文之
小村 健, 大谷地直樹
(千葉県がんセンター・頭頸科)

進行性化骨性筋炎による10年間に及ぶ高度な開口障害を呈している症例を経験した。1) 主たる原因は両側筋突起部の側頭筋の化骨化によるもので同部切除術にて30mmの開口位を得た。2) 術後の開口訓練が重要であるが原疾患により全身の関節運動障害があり、十分遂行出来ず後房り傾向にあった。3) 術後6カ月のX線診査では再化骨化は認めない。4) 開口訓練を十分検討すれば手術は、対症的ではあるが適応があると考えた。

28. 頬部放線菌症の1例

林 逸子, 田崎滋子, 佐藤恵巳
花沢康雄, 内山 聡 (千大)
三上 襄, 新井 正, 加治晴夫
(生物活性研)

今回我々は、頬部の長期持続性の腫瘍を有した症例を経験し、定型的な放線菌症の症状を呈さず、細菌培養にも成功しなかったため診断に苦慮したが、顔頸部、特に頬部は好発位であることや、難治性の慢性炎症の持続などの臨床症状と病理学的に肉牙組織中に、菊の花状の棍棒体構造をもつ菌塊を確認でき、菌塊中にグラム陽性、分岐状の菌糸を認めたことにより、*actinomyces israelii* による放線菌症と診断できた一例を報告した。

29. Beckwith-Wiedemann 症候群の経験

森川裕一, 吉田英彦, 佐藤恵巳
大木保秀, 今井 裕 (千大)

Wiedemann-Beckwith 症候群の1例を経験し、その主要症状の一つである巨舌に対し、約1年間の経過観察の後、舌縮小術を施行したので若干の考察も加え報告した。すなわち本症の巨舌に対し従来は積極的処置は取られていないが、正常な顎の発育ならびに咬合の獲得、構音障害の招来危険性等、歯科的見地より比較的早期の手術がより有効と考えた。術後1年の現在経過は良好で